

# 第4章 動物

## 第1節 土壤動物(ササラダニ類)

昭和52年に土壤動物、主にササラダニ類の調査を行なった。調査地点は、表4-1及び図4-1に示すA～Fまでの6地点である。採集、標本処理については星野(1979)の方法(角型5cmコア採集、ツルグレン法による抽出)に準じて行なった。集合プレパラートの小型節足動物のうちササラダニ亜目については、原則として種のレベルまで同定を行なった。

表4-1 調査地点の概要及びササラダニ種類数

調査地点	標高	概 要	種 数
A	600 m	北斜面、雪崩れ、堆積地、6月まで残雪あり、高基草原、礫が混交	23
B	630 m	南斜面、土壌は浅い、オニグルミ林(クリ・ミズナラが混交)	31
C	650 m	東南～東西斜面、尾根筋、ブナ伐採跡の二次林	46
D	740 m	蛇谷河岸段丘上で南へ緩傾斜ブナ林、湿潤性褐色森林土壌、(角礫が混交)	61
E	1100 m	南々東急斜面(45°)、伐採跡ブナ林(3m以下の樹高)土壌が薄い(5cm)	45
F	1300 m	林道法面上方のブナ林縁部、南斜面中腹部、土壌には角礫が混交する	40
			合計129 +

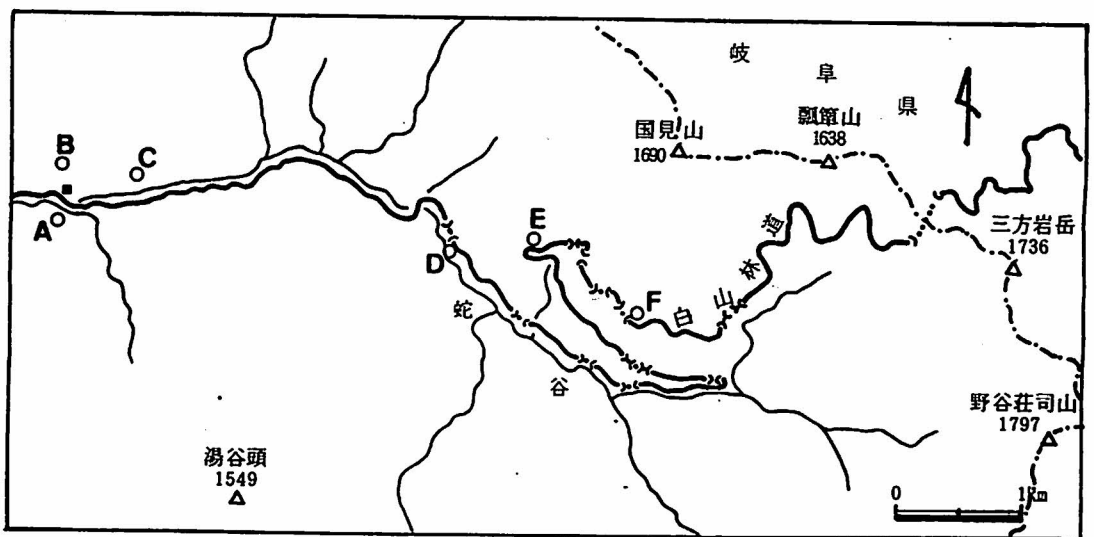


図4-1 土壤動物採取地点(A～F)

出現した種は、表4-2に示した46科68属129種であった。

A地点は、高草原であり、毎年土砂が落下、堆積して、土壤が常に攪乱されている場所である。自然環境の良好なところに多いと考えられる下等ササラダニ類は、6種、全体の26%しか占めておらず、全種数も25と、6地点の中でもっとも少ない。

B地点は、かつて出造りのあったところに植林されたオニグルミ林であるが、クリやミズナラの巨木もあり、植生は豊かである。しかし、自然観察用歩道があり、踏みつけなどの人為的干渉もみられる。出現した種数は、31種と少なく、下等ササラダニ類も10種と、全出現種の35%であった。アミメオニダニ科・オニダニ科の種数は他の地点よりやや多く、またツノバネダニ科・ケタフクロフリソデダニ科・フリソデダニ科の種数も多く、全体として草地性の種組成に近い特徴を示した。

C地点は、かつてはブナ林であったと推察されるが、現在は、ミズナラの巨木の混る二次林である。全種数は46種、下等ササラダニは21種で、全ササラダニ種数の47%と多く、この種組成からみて、自然状態は悪くない。

D地点は、谷筋に立地するブナ林であり、みたところ林相・土壤とも良好であり、全種数が61種と、全調査地点で最も多く、下等ササラダニの種数も23種、38%と少なくはない。また、環境破壊にきわめて弱いとされているユウレイダニもみられる。オオハラミゾダニは暖地性の種類であるが、比較的標高の高いこの地点だけで採集されたことが注目される。

E地点は、急傾斜の山腹で、ブナ伐採跡地には樹高の低い二次林が立地している。植生の被覆が少ないため、外気温の影響が直接土壤に及ぶと思われ、土壤環境は決して良好でないはずである。全種数が45種、下等ササラダニが17種、38%である。採取深度が5cm以下であることを考慮するならば、ササラダニの種数などからみる限りは、比較的土壤環境はよいことになる。

F地点は、林道切土法面の肩(上端)から6m林内に入った地点で、道路工事の影響は無視できないかもしれない。全種数は40種、下等ササラダニは13種、33%でいずれも多くない。

以上6地点は、標高600m~1,300mにわたり、ブナ帯であるため、ササラダニ相では、ブナ帯下部の暖帯林性の種(クゴウイレコダニ、オオハラミゾダニ、ツヤタマゴダニ、ヤマトオオイカダニ、コブヒゲダニなど)とともに、ブナ帯上部亜高山帯針葉樹林性の種(マイコダニ、チビメクラササラダニなど)もみられた。

全出現種数は129種であったが、未調査・未整理の部分も多く、また比較できるようなブナ帯のササラダニ調査もなく、現時点では、林道沿線のブナ帯土壤の状況を、ササラダニ相から明確に判定することはできない。

表4-2 蛇谷のササラダニ相と出現地点

	種	名	調査箇所					
			A	B	C	D	E	F
	1	<i>Palaeacarus hystricinus</i>			+	+	+	+
	2	<i>Archoplophora</i> sp. H 1					+	+
	3	<i>Mesoplophora japonica</i>					+	+
01	4	<i>Hoplophthiracarus kugohi</i>				+	+	+
	5	<i>Hoplophthiracarus</i> sp. H 1			+			
	6	<i>Phthiracarus japonicus</i>						+
	7	<i>Phthiracarus</i> sp. Ba						+
	8	<i>Phthiracarus</i> sp. H 1						+
	9	<i>Atropacarus striculus</i>	+		+	+		
	10	<i>Atropacarus</i> sp. H 1						+
	11	<i>Microtritia</i> sp. A						+
	12	<i>Rhysotritia ardua</i>	+	+	+	+	+	+
	13	<i>Rhysotritia</i> sp. H 1						+
02	14	<i>Gehyppochthonius rhadamantus</i>				+	+	
	15	<i>Gehyppochthonius</i> sp. H 1				+		+
	16	<i>Eohyppochthonius parvus</i>						+
	17	<i>Hypochthonius rufulus</i>	+	+				+
	18	<i>Hypochthonius</i> sp. C						+
	19	<i>Hypochthonius</i> sp. H 1				+	+	+
	20	<i>Hypochthoniella minutissima</i>				+		
	21	<i>Hypochthoniella</i> sp. H 1				+	+	+
	22	<i>Trichthonius simplex</i>						+
	23	<i>Brachychthonius jugatus</i>				+		
03	24	<i>Brachychthonius zelawaiensis</i>				+	+	
	25	<i>Brachychthonius</i> sp. H 1				+	+	+
	26	<i>Brachychthonius</i> sp. H 2				+	+	+
	27	<i>Eobrachychthonius oudemansi</i>						+
	28	<i>Eobrachychthonius</i> sp. H 1				+	+	
	29	<i>Liochthonius</i> sp. H 1				+	+	+
	30	<i>Poecilochthonius italicus</i>				+	+	+
	31	<i>Poecilochthonius</i> sp. H 1				+	+	+
	32	<i>Pterochthonius angelus</i>					+	+
	33	<i>Eulohmannia ribagai</i>					+	+
04	34	<i>Perlohmannia</i> sp. H 1					+	
	35	<i>Epilohmannia ovata</i>						+
	36	<i>Nothrus biciliatus</i>				+	+	
	37	<i>Nothrus Palustris</i>						+
	38	<i>Nothrus silvestris</i>					+	
	39	<i>Camisia lapponica</i>						+
	40	<i>Heminothrus longistosus</i>						+
	41	<i>Heminothrus</i> sp. H 1						+
	42	<i>Platynothis peltifer japonensis</i>					+	
	43	<i>Platynothis yamasakii</i>					+	
05	44	<i>Trhyppochthonius excavatus</i>					+	
	45	<i>Malaconothrus japonicus</i>	+	+				+
	46	<i>Malaconothrus pygmaeus</i>	+	+	+	+		+
	47	<i>Cyrthermannia parallela</i>				+		
	48	<i>Nanhermannia nana</i>	+				+	+
	49	<i>Hermannella punctulata</i>					+	+
	50	<i>Hermannella</i> sp. H 1				+	+	

	51	<i>Hermanniella</i> sp. H 2	ドビンダニ属の一種	+				
	52	<i>Allodamaeus adpressus</i>	アシナガダニ					+
06	53	Damaeidae sp. D	ツノジュズダニ科の一種					+
	54	Damaeidae spp.	ツノジュズダニ科の種	+	+	+	+	+
	55	Belbidae spp.	ジュズダニ科の種	+		+		+
	56	<i>Cepheus cepheiformis</i>	マンジュウダニ					+
	57	<i>Copheus</i> sp. H 1	マンジュウダニ属の一種					+
*	58	<i>Sadocepheus undulatus</i>	サドマンジュウダニ				+	
	59	<i>Sphodrocepheus</i> sp. H 1	ヤハズマンジュウダニ属	+				
	60	<i>Costeremus ornatus</i>	メカシダニ			+		
	61	<i>Eremobelba</i> sp. H 1	クモスケダニの一種					+
	62	<i>Amerus</i> sp. A	エリナシダニ属の一種	+		+	+	
07	63	<i>Amerus</i> sp. H 1	エリナダニ属の一種					+
	64	<i>Heterobelba</i> sp. H 1					+	+
	65	<i>Eremaeus tenuisetiger</i>	ホソゲモリダニ				+	+
	66	<i>Dorycranosus acutidens</i>	ミツマタツヤタマゴダニ	+				+
	67	<i>Dorycranosus</i> sp. H 1	ヤタマゴダニ属の一種					+
*	68	<i>Liacarus gammatus</i>	ホウセキタマゴダニ					+
	69	<i>Liacarus nitens</i>	ツノツキツヤタマゴダニ					+
	70	<i>Liacarus orthogonios</i>	ツヤタマゴダニ	+		+		+
	71	<i>Cultroribula lata</i>	マルタマゴダニ				+	
	72	<i>Cultroribula tridentata</i>	ミツバマルタマゴダニ				+	+
08	73	<i>Cultroribula</i> sp. F	マルタマゴダニ属の一種				+	+
	74	<i>Ceratoppia bipilis</i>	リキシダニ					+
	75	<i>Ceratoppia quadridentata</i>	ヒメリキシダニ					+
	76	<i>Ceratoppia</i> sp. B	リキシダニ属の一種			+		
	77	<i>Ceratoppia</i> sp. H 1	リキシダニ属の一種			+		
*	78	<i>Gustavia microcephala</i>	イトノコダニ	+	+			
	79	<i>Carabodes pemiculatus</i>	コガタイブシダニ					+
	80	<i>Carabodes rimosus</i>	ヒビワレイブシダニ	+		+	+	+
	81	<i>Tectocephus cuspidentatus</i>	トゲクワガタダニ			+		
	82	<i>Tectocephus velatus</i>	クワガタダニ			+	+	+
09	83	<i>Dolicheremaeus elongatus</i>	ヒョウタンイカダニ	+	+	+		
	84	<i>Dolicheremaeus</i> sp. H 1	ヒョウタンイカダニ属の一種				+	+
	85	<i>Dolicheremaeus</i> sp. H 2	ヒョウタンイカダニ属の一種				+	
	86	<i>Fissicepheus clavatus</i>	コンボウイカダニ					+
	87	<i>Megalotocephus japonicus</i>	ヤマトオオイカダダニ			+		
*	88	<i>Multioppia brevipectinata</i>	タモウツブダニ				+	
	89	<i>Multioppia</i> sp. H 1	タモウツブダニ属の一種					+
	90	<i>Operculoppia restata</i>	マブタツブダニ				+	+
	91	<i>Oppia tokyoensis</i>	トウキョウツブダニ			+		+
	92	<i>Oppia viperea</i>	コブヒゲツブダニ				+	+
10	93	<i>Oppia</i> sp. 3	ツブダニ属の一種				+	
	94	<i>Oppia</i> sp. 17	"				+	+
	95	<i>Oppia</i> sp. H 1	"				+	+
	96	<i>Oppia</i> sp. H 2	"				+	+
	97	<i>Oppia</i> sp. H 3	"					+
*	98	<i>Oppia</i> sp. H 4	"					+
	99	<i>Oppia</i> sp. H 5	"				+	+
	100	<i>Oppia</i> sp. H 7	"				+	
	101	<i>Oppia</i> sp. H 10	"				+	
	102	<i>Oppia</i> sp. H 11	"				+	
11	103	<i>Oppiella nova</i>	ナミツブダニ	+	+	+	+	+
	104	<i>Oppiella</i> sp. A	ニセツブダニ属の一種				+	+
	105	<i>Oppiella</i> sp. H 1	"				+	+
	106	<i>Quadroppia quadricarinata</i>	ヨスジツブダニ				+	+



	107	<i>Suctobelbella</i> sp. H 1	マドダニ属の一種						+	
•	108	<i>Suctobelbella</i> spp.	マドダニ属の種	+	+	+	+	+	+	+
	109	<i>Suctobelbilla tuberculata</i>	マドダニモドキ		+	+				
	110	<i>Scheloribates latipes</i>	コンボウオトヒメダニ	+	+	+				
	111	<i>Scheloribates rigidisetosus</i>	マガタマオトヒメダニ							+
	112	<i>Scheloribates</i> sp. B	オトヒメダニ属の一種				+	+	+	+
12	113	<i>Protoribates</i> sp. H 1	ナガコソデダニ属の一種		+	+	+	+		
	114	<i>Protoribates</i> sp. H 2	"							+
	115	<i>Ceratozetes</i> sp. C	コバネダニ属の一種							+
	116	<i>Diapterobates</i> sp. H 1	ハシゴコバネダニ属の一種	+						
	117	<i>Eupelops</i> sp. H 1	エンマダニ属の一種							+
•	118	<i>Eupelops</i> sp. H 2	"							+
	119	<i>Oribatella</i> sp. H 1	カブトダニ属の一種							+
	120	<i>Prionoribatella dentilamellata</i>	ノコギリダニ	+						+
	121	<i>Prionoribatella</i> sp. H 1	ノコギリダニ属の一種							+
	122	<i>Anachipteria grandis</i>	カブトダニモドキ		+					
13	123	<i>Neoribates aurantiacus</i>	フロロフリソデダニ	+	+			+	+	
	124	<i>Neoribates macrosacculatus</i>	オオフロロフリソデダニ					+		
	125	<i>Neoribates</i> sp. H 1	フロロフリデダニ属の一種		+					+
	126	<i>Galumna</i> sp. H 1	フリソデダニ属の一種		+					
	127	<i>Pergalumna duplicata nipponica</i>	チビゲフリソデダニ		+					
•	128	<i>Pergalumna harunaensis</i>	ハルナフリソデダニ		+					
	129	<i>Pergalumna intermedia</i>	アラゲフリソデダニ		+					
		種 数 合 計		23	31	46	61	45	40	

14

## 第2節 河川生物

現在、尾添川流域に自然分布する魚類は、イワナとカジカ(ゴリ)の2種類だけである。イワナは、手取川本流(標高100 m程度)から、標高1,000 m~1,200 mの支流まで分布している。しかし、蛇谷流域の支流のうちでも、合流点に落差の大きな滝のある支流、例えばシリタカ谷、岩底谷などには、分布しないという。また、白山林道沿いの支流で、工事の影響のあった瓢箪谷の魚密度は、近年減少したという。蛇谷本流では、シリタカ谷合流点付近にある発電用取水口から下流の減水区では、個体数は少ない。

カジカは、昭和30年代前半には、蛇谷本流などに相当高密度でみられたが、取水、林道工事などの影響によるものか、その姿は著しく減少した。

これらの2種の他に、サクラマス(陸封型はヤマメ)が溯上していたことは、伝聞や、また「鱒帰り」(雄谷川)という地名のあることから明らかである。しかし、本流に大型の堰堤が建設されてから、溯上するサクラマスだけではなく陸封していたと推察される本種(ヤマメ)も、全く絶えてしまった。

尾添川本流あるいは、大規模な支流、例えば雄谷下流部や蛇谷などの底生動物は著しく貧弱である。水生昆虫類では、シマトビケラ、ミドリカワゲラ、コカゲロウなど、1回の採集で5種類程度しかみられないことが多い。林道工事による土砂の流出が、この貧弱な生物相の原因であることも否定でき

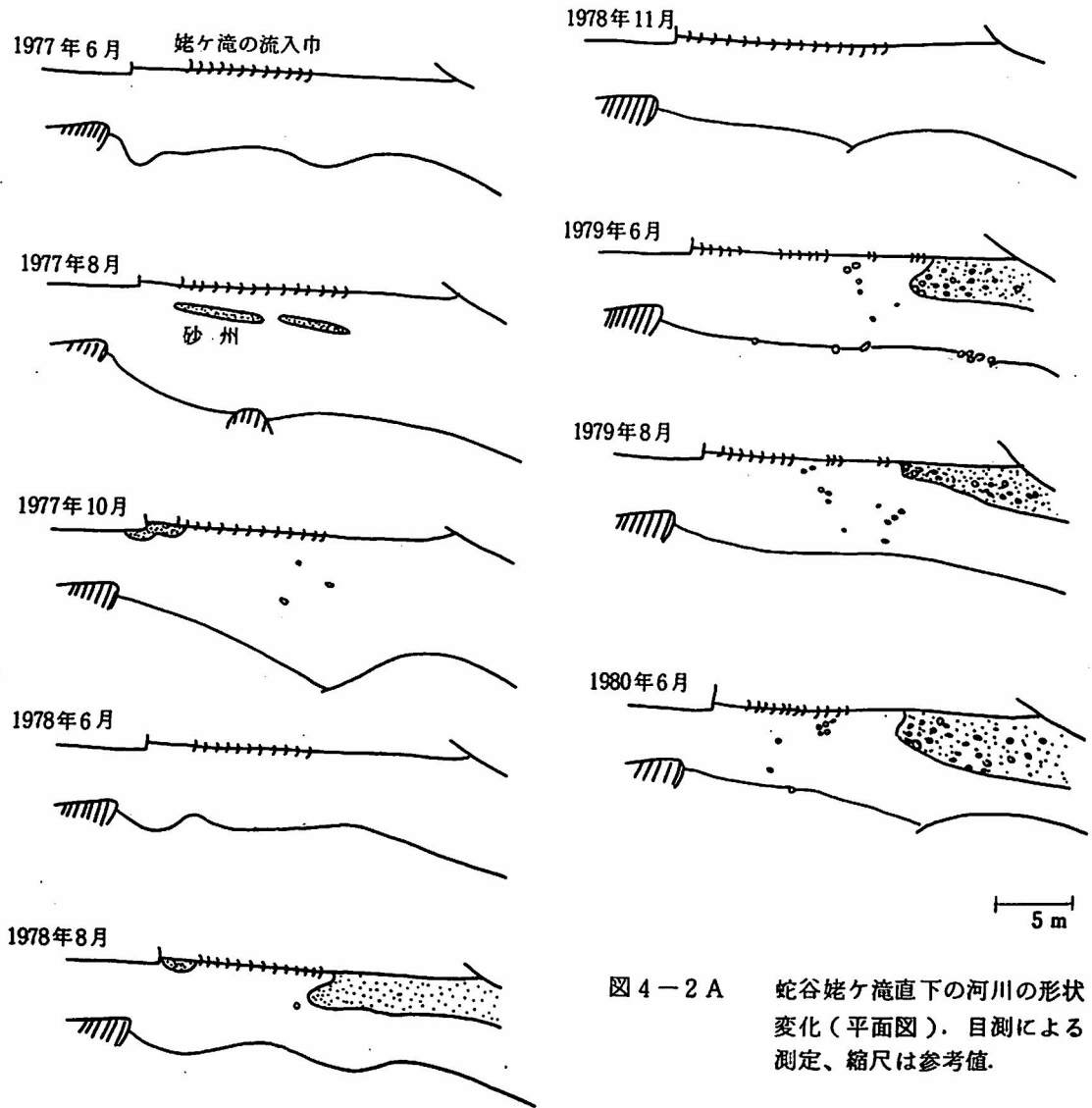


図4-2A 蛇谷姥ヶ滝直下の河川の形状変化(平面図). 目測による測定、縮尺は参考値.

ない。しかし、尾添川流域は、県下でも有数の豪雪地帯であり、さらに急傾斜地も多く、一部地域の基磐岩はもろく、崩壊地も少なくない。これらの自然条件があいまって、尾添川は工事着工以前も融雪期や洪水期に大量の土砂流出がみられ、河床の安定しないいわゆる「荒れ谷」であったと推察される。

5年間の調査期間中も、堆積土砂量には変化(図4-2参照)がみられるものの、底生動物には回復傾向は、ほとんどみられなかった。河床の安定していないこととともに、融雪期の洪水の高水位と、取水による渇水といった流量の著しい変動も、底生動物が貧弱になっている原因の一つであることは明らかである。

これに対して、小規模な支流や支沢は、底生動物も豊富であり、図4-3に示すように、本流の底生動物のかなりの部分は、支流から供給されていると考えられる。中宮温泉付近の灯火採集によって

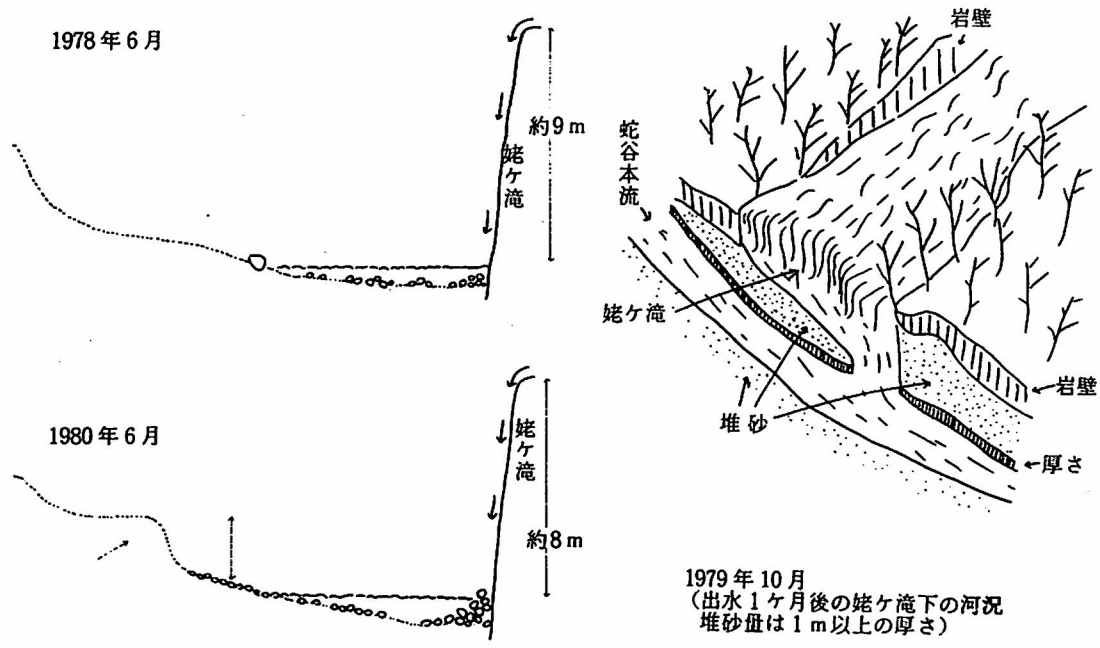


図4-2 B 1979年9月の出水前後の河床の変化

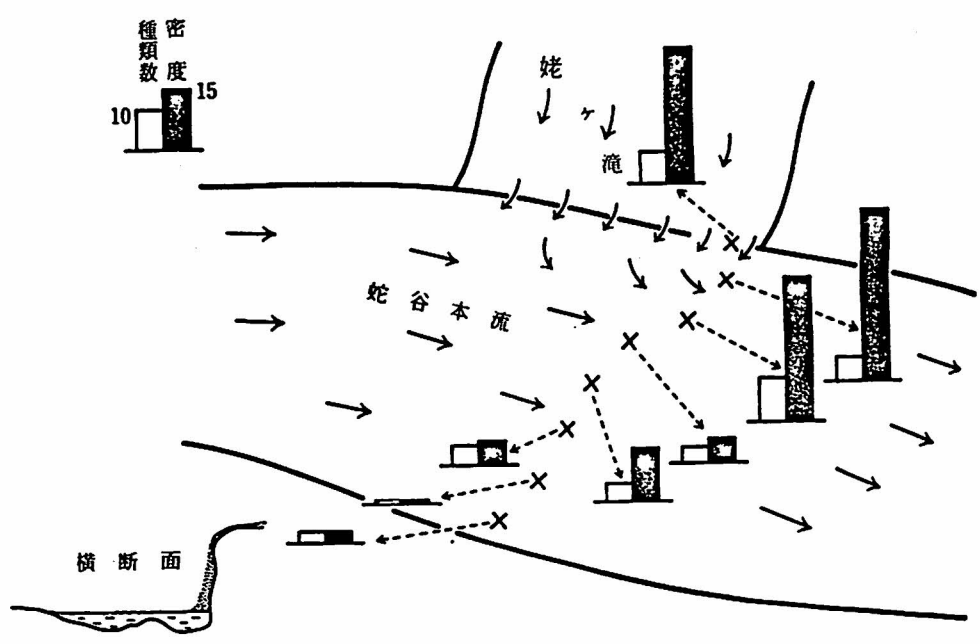


図4-3 姥ヶ滝付近の底生動物の分布(7月)(大串、1980による)

表4-3 蛇谷流域のトビケラとカワゲラ

(谷田、1981、1982による成虫の記録)

トビケラ類	ウスバキトビケラ	カワゲラ類
<i>Apsilochorema sutchanum</i> *	ニホンウスバキトビケラ	ミジカオカワゲラ
イノブスヤマトビケラ	サハリントビケラ(仮称)	オビミジカオカワゲラ
クラマナガレトビケラ	ニホンコエグリトビケラ(仮称)	セッケイカワゲラ
トワダナガレトビケラ	イシカワヒラタコエグリトビケラ	ヒメクロカワゲラ
ランバカンタナガレトビケラ*	(仮称)	フタトゲクロカワゲラ
タニガワトビケラ*	ユミモントビケラ*	ミジカオクロカワゲラ
キソタニガワトビケラ*	オンドケトビケラ*	オカモトクロカワゲラ
キソイワトビケラ*	ホタルトビケラ*	トワダオナシカワゲラ
オンドケミヤマイワトビケラ*	ニンギョウトビケラ	オナシカワゲラ
ヒゲナガカワトビケラ	マルバネトビケラ	オナシカワゲラ属
チャバネヒゲナガカワトビケラ	コカクツツトビケラ	( <i>Nemoura stratum</i> )
シロフツヤトビケラ*	フトヒゲカクツツトビケラ	以上は雪上で採集された種
ウルマーシマトビケラ		ヤマトヒロバアミメカワゲラ
シマトビケラ属の一種		オオメフタツメカワゲラ
コガタシマトビケラ		ミドリカワゲラ

\*本流以外に生息することの明らかな種類

得られたトビケラ27種のうち約15種までは主として支流に分布する種であった(表4-3)。

尾添川本流や大型の支流は、現在荒れ谷であり、底生動物も少ないのにもかかわらず、イワナについては、高い生産性を保っている。これらの資源を保全し、さらに河川環境の改善をはかるためには、林道などの工事に際して、土砂流出を最小限にいくとめるような工法や土留工の施工が必要である。また、夏期の濁水が生物のみならず、河川景観にも悪影響を与えていることは明白であり、河川の生態系を維持する水量を確保することが望ましい。白山林道の開通により、交通の便がよくなるとともに、遊漁者が増加している。尾添川は、本流から支流まで水域を広く移動利用する大型イワナの生息する国内でも数少ない場所である。これらの貴重な天然資源を保全するため、産卵場の確保、禁漁期の徹底が必要であり、また一部区間については禁漁区を設定することが望ましい。

### 第3節 昆虫類

尾添川流域、とくに白山林道周辺の昆虫相については、表4-4に示した。現在、種名の判明しているものは8目246種である(水生昆虫類を除く)が、未調査のグループも多く、さらに種類数は増加することは確実である。

林道沿線には、緑化工施工の際の吹き付け種子に由来するヨモギ、イタチハギなどの群落がみられる。ヨモギにはヨモギハムシ、アイノゾウムシが、イタチハギにはエンドウアブラが、また播布種子に混入していたと思われるイタドリにはイタドリハムシといった食植性の昆虫がみられる。これらの昆虫は、現在は外来性植物に依存してはいるものの、本来当該地域に分布していたものと考えられ、

表4-4 白山林道の昆虫相

蜻蛉目 *ミヤマアキアカネ	ジャガイモヒゲナガアブラムシ <i>Brachycaudus helichrysi</i> (Kaltenboch)	ヒメフンバエ
直翅目 ミヤマフキバッタ	ダイコンアブラムシ コウゾリナヒゲナガアブラムシ ヨモギフトオヒメヒゲナガアブラムシ	膜翅目 トサヤドリキバチ アオコシホソハバチ <i>Tenthredo finschi</i> Tab-uchi
半翅目 *ツチカメムシ *ヒメマルカメムシ アカスジカメムシ トゲカメムシ *エゾアオカメムシ ヒメツノカメムシ *オオヘリカメムシ コバネナガカメムシ オオメカメムシ *クロモンサシガメ *オオトビサシガメ メクラカメムシの1種 ツノゼミ フタテンオオヨコバイ シロズオオヨコバイ(ヤナギ、 ハンノキ等に群生という) ブチマクヨコバイ (ブナ科植物に寄生) <i>Tuberolachnus salignus</i> (Gmelin) モミジニタイケアブラムシ ハンノキヒゲナガブチアブラムシ ハンノチアブラムシ エンドウヒゲナガアブラムシ ミカンミドリアブラムシ クサギアブラムシ マメアブラムシ <i>Aphis kurosawai</i> Takahashi ウレモコウアブラムシ	ネギアブラムシ サビタトックリアブラムシ ニンヤワタムシ シラカバオオワタムシ ヤナギミキアリマキ アマミヒゲナガアブラムシ キツネアザミヒゲナガアブラムシ アザミオオヒゲナガアブラムシ	(上記の2種はヤマブキショウマやシシウドの花に飛来していたが、シシウドの花への飛来数は多かった。その割合はヤマブキショウマ1に対してシシウド3乃至4であった) トゲムネアオハバチ <i>Pristiphora</i> sp. (ナナカマドの1種の葉を食害していた幼虫を採集) チビキアシヒラタヒメバチ ? <i>Charops</i> sp. (ナナカマドの1種の枝にぶらさがっていた繭を採集) ツヤクロズメバチ *オオモンクロベッコウ *ルリジガバチ ヤマジガバチ *アルマンモモアカナバチ オオキスジジガバチ ハクサンブセン ヤマテハラツヤハナバチ(シシウドの花に飛来していた) <i>Lasioglossum</i> sp. (ヤマブキショウマやシシウドの花に飛来していたが、大凡5:4の割合でシシウドの花への飛来が多かった) *オオハキリバチ コマルハナバチ(シモツケソウの花に飛来していた)
	脈翅目 *ヒメカマキリモドキ *オオツノトンボ *ウスバカゲロウ	
	双翅目 *ウシアブ イヨシロオビアブ ハラボソムシヒキ <i>Empis seminitida</i> Frey ハナアブ(ヤマブキショウマやシシウドの花に飛来していた) ホソヒラタアブ ナミホシヒラタアブ マメヒラタアブ(ヤマブキショウマの花に飛来していた) ホシツヤヒラタアブ オオヨコモンヒラタアブ(シシウドの花に飛来していた) ツマグロキンバエ(ヤマブキショウマの花に飛来していた)	

\* はセンター所蔵標本による。無印は富樫氏の教示による。

鱗翅目

- \*ダイミョウセセリ
- \*キマダラセセリ
- \*ヒメキマダラセセリ
- \*コキマダラセセリ
- \*ミヤマチャバネセセリ
- \*ウスバシロチョウ
- \*キアゲハ
- \*スズグロチョウ
- \*モンキチョウ
- \*ベニシジミ
- \*ツバメシジミ
- ゴマシジミ
- アサマシジミ
- \*クモガタヒョウモン
- \*ミドリヒョウモン
- \*アサマイチモンジチョウ
- \*コミスジ
- \*ホシミスジ
- \*サカハチチョウ
- \*キベリタテハ
- \*コムラサキ
- \*スミナガシ
- \*オオムラサキ
- \*クロヒカゲ
- テングチョウ
- \*サザナミズメ
- \*ヒサゴズメ
- \*ビロウドズメ
- \*クスサン
- \*ムラサキシタバ
- \*ベニシタバ
- \*ゴガタキシタバ
- \*ギンモンズメモドキ
- ヒメトラガ(ヤマブドウ)
- オオホソバケンモン(カワラハ  
ンノキ)
- ハガタキリバ(バッコヤナギ)
- ギンボシケンウワバ(ハクサン  
アザミ)
- キクケンウワバ(ノゲシ)

- Epipsammia sp.(新種と  
思われる)
- ヒトツメカギバ(ミズキ)
- ヨコジマナミシャク
- クロミスジシロエダシャク
- トチノメイガ(トチノキ)
- リンゴモンハマキ
- ミダレカクモンハマキ
- ギンボシモドキハマキ(マンサ  
ク)
- ウンモンハマキ(シナノキ)
- ブナハマキ(ブナ)
- ヤマボウシハマキ(ヤマボウ  
シ)
- シロクロキバガ
- Agonopteryx angericeta  
(シシウド)
- Phyllonorycter pteroca-  
rvae (Kumata) (オニグルミ)
- Phyllonorycter juglan-  
dis (Kumata) (オニグルミ)
- Acrocercops transecta  
Meyrick (オニグルミ)
- ムクゲコノハ(クリ)

鞘翅目

- \*ハンショウ
- \*マヤサンオサムシ
- \*ヒメオサムシ
- \*マルクビゴミムシ
- \*ガロアミズギワゴミムシ
- \*オオアオモリヒラタゴミムシ
- \*ホソヒラタシデムシ
- \*ミヤマクワガタ
- \*アカアシクワガタ
- \*ヒメオオクワガタ
- \*コクワガタ
- \*スズクワガタ
- \*センチコガネ
- オオマガソコガネ

- \*ケブカマガソコガネ
- イガクロツヤマグソコガネ
- \*Sericania sp.
- \*Ophthalwoserica sp.
- \*クロホシヒロウドコガネ
- \*カブトムシ
- \*マメコガネ
- \*セマダラコガネ
- \*キンスジコガネ
- \*コアオハナムグリ
- \*オオチャイロハナムグリ
- \*トラハナムグリ
- \*ヒメトラハナムグリ
- \*クロナガタマムシ
- \*オオクシヒゲコメツキ
- \*カバイロコメツキ
- \*オバポタル
- ミヤマクビホソジョウカイ
- アオジョウカイ(シシウドやヤ  
マブキショウマの花に飛来し  
ていた)
- \*ジョウカイボン
- \*ベニポタル
- \*オオキノコムシ
- ヨツボシオオキノコムシ(広葉  
樹の1種の倒木に寄生してい  
たヒラタケ?より採集)
- \*トホシテントウ
- コクロヒメテントウ
- \*テントウムシ
- \*ジュウロクロホシテントウ
- \*キマワリ
- ハムシダマシ
- アオハムシダマシ(ヤマブキシ  
ョウマの花に飛来していた)
- \*ナガハムシダマシ
- クロキカワムシ(ヒメコマツの  
倒木の樹皮下より幼虫が採集  
された)
- \*アオカミキリモドキ
- \*ウスバカミキリ
- コバネカミキリ

( )は食草を示す。

*オオクロカミキリ	*クワカミキリ	*アオカメノコハムシ
*ホソカミキリ	*ヒゲナガゴマフカミキリ	*イカリヒメジンガサハムシ
カラカネハナカミキリ(シシウ ドの花に飛来していた)	*アトモンサビカミキリ	ムツモンオトシブミ
アカイロニセハムシハナカミキ リ	*アトモンチビカミキリ	*ウスモンオトシブミ
ミワヒメハナカミキリ	*ハンノアオカミキリ	コブヒゲホソゾウムシ
カクムネヒメハナカミキリ	*ヤツメカミキリ	シロコブゾウムシ
チャイロヒメハナカミキリ	*シラホシカミキリ	*フキヒョウタンゾウムシ
チャボハナカミキリ(上記の4 種は、いずれもヤマブキショ ウマの花に飛来していた)	*ヘリグロリングゴカミキリ	ハスジカツオゾウムシ(イタド リ)
*アカハナカミキリ	*ホソキリンゴカミキリ	アイノカツオゾウムシ(ヨモギ)
ヒゲジロカミキリ	*ルリクビホソハムシ	オオゴボウゾウムシ
ニンフハナカミキリ	バラルリツツハムシ(2号ト ンネルの手前にある親谷の 湯への道で採集)	オジロアシナガゾウムシ
マルガタハナカミキリ	セスジツツハムシ(13号トン ネルより県境までの道でシ シウドの花上より採集)	キスジアシナガゾウムシ
(上記の3種は、いずれもヤ マブキショウマやシシウドの 花に飛来していた)	ドウガネツヤハムシ	オオクチカクシゾウムシ
ヨツスジハナカミキリ(シシウ ドの花に飛来していた)	*リングコフキハムシ	シロホシヒメゾウムシ(ヤマブ キショウマの花に飛来していた)
*ヤツボシハナカミキリ	ヨモギハムシ	オオゾウムシ
クビホソアカカミキリ	*ルリハムシ	Polygraphus sp.(ヒメコマ ツの倒木の樹皮下より採集さ れたが、種名は確認されなかつた)
*ヨツボシカミキリ	Gonioctera morimotoi	ハイマツアトマルクイクムシ
*ルリボシカミキリ	Kimoto	(前種と同様、ヒメコマツの倒 木の樹皮下より採集されたが、 本県でははじめての記録であろ う。またこれまでヒメコマツを 加害するという記録もないらし く、ここに新しい加害樹として ヒメコマツを記録しておく)
*エグリトラカミキリ	カバノキハムシ	
*マヤサンコブヤハズカミキリ	ブチヒゲウスバハムシ	
*ゴマダラカミキリ	クワハムシ	
*カラフトヒゲナガカミキリ	*ウリハムシモドキ	
*ヒメヒゲナガカミキリ	ホタルハムシ	
*ビロウドカミキリ	*ムナグロツヤハムシ	
*センノカミキリ	*イタドリハムシ	
	*オオキイロマルノミハムシ	
	*ヒメキベリトゲトゲ	
	*キベリトゲトゲ	

現在のところ昆虫類では新しく侵入した種や分布を拡大した種は、確認されていない。

また、裸地化した部分では、ミヤマフキバッタの個体数が多く、一部の植物に食害がみられる。しかし、ブナ林など天然植生の残っているところでは、フキバッタの食害はほとんどみられない。

尾添川流域に分布する昆虫のなかで、注目される種類としては、アサマジミ、ミヤマハンミョウ、ハクサンホソヒメクロナガオサムシがあげられる。アサマジミは、本州中央山地の個体群から隔離された個体群で、数も決して多くなく保護の必要性は高い。ミヤマハンミョウは、分布西南限にあたる個体群であり、ハクサンホソヒメクロナガオサムシは山頂部に分布するハクサンクロナガオサムシ

シと並んで、白山において種分化の進行している昆虫であり、保護の必要性が高い。

林道沿線の植生には、とくに昆虫による顕著な食害はみられないが、林道山頂部近くのクロベの枝枯れは、恐らく昆虫によると考えられる。種名は、現時点では、明らかになっていない。

#### 第4節 鳥 類

林道沿線の鳥類の種類相及び季節的、年次的な変化を知るため、主にライントランセクト法による調査を行なった。調査範囲は自然保護センターから三方岩岳のピークまでの、林道及び登山道沿いで、調査は早朝から始め、午前中に終わるようにした。観察幅は調査コースの片側50mずつ100m幅である。

センサスの結果に、これ以外に観察された種類も含め、確認できた鳥類は29科、75種(表4-5)である。積雪や林道開設時期の関係から、晩秋から春までの調査がほとんど行なえなかったので、実際にはこの時期の種類を中心にさらに増えるものと思われる。夏期と秋期のセンサス結果を表4-6及び表4-7に示した。

夏期にはセンサス範囲外を含め、3年間の合計で47種が確認された。優占種はキセキレイ(16.4%)、ホオジロ(14.6%)、ウグイス(9.6%)、カケス(8.3%)、オオルリ(7.3%)などである。優占上位種の配列には年次変化はほとんどみられない。秋期には28種確認され、シジュウカラ(22.1%)、ウグイス(13.0%)、キセキレイ(10.3%)、ヒガラ(9.9%)、カケス(8.4%)などが優占種である。夏期にくらべると、優占上位種の年次的なちがいが多い。

過去の調査例がないので、林道建設以前の鳥類相が不明であるが、白山山系の他の場所で自然環境(植生、地形、標高など)がよく似ており、林道建設等人為的影響のない高三郎山の鳥類相<sup>1)2)</sup>と蛇谷の鳥類相を比較してみる。

高三郎山では、夏期にはコルリ、ウグイス、シジュウカラ、ヒガラ、カケスが優占上位種である。一方蛇谷では、キセキレイ、ホオジロが特に優占しているのが目立ち、コルリがごく少数であるのが大きなちがいとなっている。他のウグイス、シジュウカラ、ヒガラ、カケスは両地域とともに優占上位の種類となっている。両地域とも調査範囲には、ブナ林や岩角地のクロベ(ヒノキ)-ヒメコマツ林があること、及び急傾斜でブナ林周辺には低木林や高茎草原が多いことなどが、共通種の多いことに反映しているものと考えられる。蛇谷で最優占種となっているキセキレイは、林道沿い及び沢沿いに多く観察され、林の中などにはいない。また、トンネル、土砂止め、路肩などの人工物や、沢沿いの岩石のすき間などに営巣場所が見つまっている。次にホオジロは林道沿いの草地や低木林に多く観察される。これら2種は、いずれも林道建設の影響による環境の変化にともない、生息適地が増えた

1) 上馬康生 1977 犀川源流地区の鳥類、石川県の自然環境、第3分冊鳥獣、66-80、石川県

2) ———— 1978 犀川上流、高三郎山の鳥類1)繁殖期における鳥類群集構造、石川県白山自然保護センター研究報告、第4集、63-78、石川県



たために増加したものと考えられる。一方コルリが高三郎山にくらべ蛇谷で特に少ないのは、この鳥がブナ林の低木の繁みを生息地としており、林道沿いには適した場所が少ないためであり、林道建設による減少とも考えられる。

秋期には高三郎山ではシジュウカラ、ヒガラ、カケス、ウグイスが優占し、これに、ときにヒヨドリやツグミなどの移動中の群が加わっている。一方蛇谷では優占種の構成は、キセキレイ、ホオジロを除くと高三郎山とよく似ている。

林道建設の影響で、増加したり減少したと考えられる種類があるものの、鳥類相全体からみると、カラス、ドバト等の俗化を示す種は極めて少なく、ごく一部(中宮温泉付近にハシボンガラスがみられる)に限られており、自然度の比較的高い種構成を示している。

次に蛇谷の鳥類相で特記すべき種について述べることにする。

イヌワシは蛇谷には1番が生息していることが確認されており、調査期間中、昭和53年と昭和56年に当才と思われる幼鳥を観察し、繁殖が確認された。また巣も3か所で発見されているが、いずれも期間中は未使用であり、別の巣があると考えられる。イヌワシの繁殖の中心時期は晩秋～春と林道の閉鎖時期にあたるため、生息に対する林道の影響は少ないものと思われる。

表4-5 白山林道鳥類目録

サギ科	ツツドリ	オオアカゲラ
ササゴイ	ホトトギス	コゲラ
ワシタカ科	フクロウ科	ヤイロチョウ科
トビ	コノハズク	ヤイロチョウ
オオタカ	オオコノハズク	ツバメ科
ツミ	フクロウ	ツバメ
ハイタカ	ヨタカ科	イワツバメ
ノスリ	ヨタカ	セキレイ科
サシバ	アマツバメ科	キセキレイ
クマタカ	ハリオアマツバメ	セグロセキレイ
イヌワシ	アマツバメ	ビンズイ
キジ科	カワセミ科	サンショウクイ科
ヤマドリ	ヤマセミ	サンショウクイ
ハト科	アカショウビン	ヒヨドリ科
キジバト	ブッポウソウ科	ヒヨドリ
アオバト	ブッポウソウ	モズ科
ホトトギス科	キツツキ科	モズ
ジュウイチ	アオゲラ	カワガラス科
カッコウ	アカゲラ	カワガラス

ミソサザイ科	オオルリ	アオジ
ミソサザイ	エゾビタキ	クロジ
イワヒバリ科	エナガ科	アトリ科
カヤクグリ	エナガ	アトリ
ヒタキ科	シジュウカラ科	マヒワ
コマドリ	コガラ	ウソ
コルリ	ヒガラ	イカル
ルリビタキ	ヤマガラ	ハタオリドリ科
ジョウビタキ	シジョウカラ	スズメ
マミジロ	ゴジュウカラ科	カラス科
トラツグミ	ゴジュウカラ	カケス
ツグミ	メジロ科	ホシガラス
ヤブサメ	メジロ	ハシボソガラス
ウグイス	ホオジロ科	
メボソムシクイ	ホオジロ	
センダイムシクイ	カシラダカ	29科 75種
キビタキ	ノジコ	

ヤイロチョウは昭和55年6月8日の午前5時30分～6時頃に白山自然保護センター近くのブナ・ミズナラ林を、囀りながら移動していくのを確認している。白山地域での初記録であり、この日だけの記録である。

クロジは白山地域のブナ帯上部から亜高山帯下部にかけての、低木層の発達した疎林にみられるが、今まで繁殖は未確認であった。今回当該地域で営巣を確認することができた。

表4-6 夏期の林道沿線の鳥類個体数(带状個体数調査、100m幅)

調査日	昭和52年6月23日	昭和54年6月5日	昭和56年7月18日	合計 個体数	優 占 度 (%)
調査時刻	4:35 ~ 9:32	4:40 ~ 8:55	4:45 ~ 9:00		
天気	薄曇	快晴	晴れ		
調査コース	センター~県境	センター~三方岩岳頂上	センター~三方岩岳頂上		
種名	個体数				
キセキレイ	23	25	17	65	16.4
ホオジロ	17	25	16	58	14.6
ウグイス	9	17	12	38	9.6
カケス	8	11	14	33	8.3
オオルリ	12	9	8	29	7.3
ミソサザイ	7	8	8	23	5.8
ヒガラ	6	6	11	23	5.8
シジュウカラ	10	5	5	20	5.1
コゲラ	5	5	4	14	3.5
ヒヨドリ	3	4	3	10	2.5
ヤブサメ	4		4	8	2.0
トビ	4	2	1	7	1.8
キビタキ	3	1	2	6	1.5
モズ	5		1	6	1.5
ホシガラス	1	3	1	5	1.3
ゴジュウカラ	2	2	1	5	1.3
クロジ		1	4	5	1.3
アマツバメ	5			5	1.3
ビンズイ		3	1	4	1.0
キジバト	1	2		3	0.8
アオゲラ	1	2		3	0.8
ブッポウソウ		3		3	0.8
カッコウ		3		3	0.8
アカゲラ	1	1		2	0.5
センダイムシクイ	1	1		2	0.5
ウソ		1	1	2	0.5
コルリ		2		2	0.5
キツキ sp.	2			2	0.5
ツツドリ	1			1	0.3
オオアカゲラ	1			1	0.3
ヤマガラ		1		1	0.3
カワガラス		1		1	0.3
メボソムシクイ		1		1	0.3
ノスリ		1		1	0.3
カヤクグリ		1		1	0.3
コガラ			1	1	0.3
ホトトギス			1	1	0.3
ノジコ			1	1	0.3
計	132	147	117	396	100

センサス範囲外確認種:メジロ、トラツグミ、アカショウビン、オオコノハズク、イカル、コマドリ、ジュウイチ  
コノハズク、ルリビタキ

表4-7 秋期の林道沿線の鳥類個体数(带状個体数調査、100m幅)

調査日	昭和52年9月13日	昭和54年10月10日	昭和55年9月14日	合計 個体 数	優 占 度 (%)
調査時刻	5:35 ~ 9:30	8:00 ~ 10:50	6:03 ~ 10:22		
天気	晴れ	快晴	快晴		
調査コース	センター～県境	1号隧道～三方岩岳頂上	センター～三方岩岳頂上		
種名	個体数				
シジュウカラ	15	3	40	58	22.1
ウグイス	2	16	16	34	13.0
キセキレイ	15		12	27	10.3
ヒガラ	12	5	9	26	9.9
カケス	8	1	13	22	8.4
ホオジロ	4	11	5	20	7.6
エナガ		7	9	16	6.1
ヤマガラ	1	7	4	12	4.6
コガラ		4	6	10	3.8
コゲラ	3	6		9	3.4
イワツバメ	5			5	1.9
ゴジュウカラ	1	2	1	4	1.5
ホシガラス	1	1	1	3	1.1
キジバト	2			2	0.8
トビ			2	2	0.8
メジロ		2		2	0.8
キツキ SP.		2		2	0.8
ヒヨドリ		1		1	0.4
ヤブサメ	1			1	0.4
ミソサザイ	1			1	0.4
オオアカゲラ	1			1	0.4
アマツバメ	1			1	0.4
アオゲラ		1		1	0.4
カワガラス			1	1	0.4
エゾビタキ		1		1	0.4
計	73	70	119	262	100

センサス範囲外確認種：オオルリ、クマタカ、イヌワシ

第5節 ほ 乳 類

1. ニホンカモシカ

石川県下には、大日山系、白山山系及び医王山系の山地 942 km<sup>2</sup>に 2,150 頭から 3,000 頭が生息すると推定した(水野ほか 1982)。その中で尾添川流域は特にカモシカの生息密度が高い区域といえることができる。この区域ではこれまでも種々の調査研究がなされてきた。森下・村上<sup>1)</sup>は糞から生息密度を推定して 1.6~4.3 頭/km<sup>2</sup>を求め、蛇谷の 48 km<sup>2</sup>に 90~140 頭とした。目附谷流域では密度 4.4~9.1 頭/km<sup>2</sup>、27.9 km<sup>2</sup>に 181~206 頭と推定した(水野・茨木 1980)。また桜井<sup>2)</sup>

表 4-8 尾添川流域におけるカモシカの死体等発見記録(水野 1981 からの抜粋に追加)

位 置	年月日	発 見 者	状 況	性 年令	体 長 体 重	死 因 等	標 本 等
白山林道、1号トンネル	47. 7.	中 谷	道路法面を転落し 足に負傷し動けず	成		道路法面を転落	生存 自力で去る
吉野谷村温泉山	48. 4.	桜 井	白骨化死体			不 明	頭 骨
中宮温泉	48. 5. 18	中宮温泉	負傷し川で動けない 5. 20 死亡	♂成	40.5 kg	角による突傷、出血 多量	剥製(センター 展示室)
尾添川、シリタカ谷	49. 6. 5	中 川	なだれ跡から出る	♂成	128 cm	} 厳冬期になだれに 会い、埋まったもの の	頭 骨
"	49. 6. 5	"	"	♀成	122 cm		頭 骨
"	49. 6. 5	"	"	1	103 cm		頭 骨
蛇谷 湯の谷	49. 6.	西 村	散乱死体			不 明	頭 骨
尾添川、カジャ谷	50. 6.	中 川	なだれ跡から出る	♂成		なだれに埋ったもの	頭 骨
蛇谷川原	51. 5	不 波	川原に腐乱死体			なだれと推定	頭 骨
岩間温泉	52. 11.	尾口村役場	ダンプと衝突	♀成		轢死	毛皮、全身骨格
蛇谷	53. 3	増 井	死体が川を流される	♂成		なだれと推定	流 失
白山林道県境	53. 11. 2	岐阜県林業 公社	胸部に角突き傷	♂ 0		角による突傷	骨 格
雄谷、取入歩道	54. 4	クマ猟師	谷のなだれ跡	成		なだれと推定	下かく骨
白山林道 6号電話	54. 5. 14	下 家	道路上に生後間も ない子	♀ 0	39 cm	生 存	放置し親が来た と思われる
白山林道 12号トンネル	55. 6. 4	石川県 林業公社	トンネルわきに死 体	0	48 cm	法面の滑落	剥製(白山自然 保護センター)
吉野谷村蛇谷	55. 6. 17	茨 木	川原に白骨化			なだれと推定	放 置
吉野谷村蛇谷	55. 6. 24	山 岸	川原に白骨化			なだれと推定	放 置
蛇谷、途中谷口	56. 4. 5	滝 沢	なだれにうまる	♀成	124 cm	なだれによる圧死	頭骨、皮、胃内容
	4. 5	滝 沢	"	0	98 cm	"	頭 骨
中宮温泉	56. 5.	西 村	散 在	成		不 明	放 置
蛇谷、姥が滝下	56. 6. 14	太 田	川原に散在	"		不 明	下かく骨

1) 森下正明・村上興正、1970、ニホンカモシカの生態学的研究。白山の自然(石川県)：276-321

2) SAKURAI, M., 1981, Socio-ecological study of the Japanese Serow, with reference to the flexibility of its social structure. Ecol. Physiol. Japan, 18:163-212

は個体識別によるカモシカの社会構造の研究と併せて、中宮温泉湯谷で1973年に、16頭から1978年の33頭に増加したとも報告している。この流域へ冬から残雪期にかけて入山する多くの人が、過去10年間でも、カモシカを目撃することは増えてきたと言う。

牛首川との合流から上流の尾添川流域全体190km<sup>2</sup>は、ほぼ全域がカモシカ分布地域である。冬期間の分布に限れば、高密度区域が117km<sup>2</sup>(5~7頭/km<sup>2</sup>)、中密度区域が8km<sup>2</sup>(3~4頭/km<sup>2</sup>)、低密度区域が43km<sup>2</sup>(1.5~2頭/km<sup>2</sup>)となり推定頭数670~940頭とすることができる。

尾添川流域はカモシカの死亡個体がよく発見される所であり1972年から1980年までの9年間に、白山自然保護センターで把握している死亡・負傷等は21個体にのぼる(表4-8)。

死因で最も多いのは雪崩による圧死と推定される12例である。白山林道の法面を滑落して死亡したものが2例、また車の接近で親とはぐれたものが1例あり、地域個体群の大きさからすれば影響は小さいものではあるが、一つの事件といえることができる。

## 2. ニホンザル

尾添川流域は特にサルの群れが多い地域であり、1970年にはじめて群れ分布の概要が整理された<sup>1)</sup>。それによると、同流域の支流、蛇谷、中ノ川、丸石谷、雄谷に計8群248~259頭が分布すると推定していた。その後詳細な調査が進められ、群れ識別が進んで再検討が加えられ、昭和56年時点で6群、280から330頭の範囲とみられている。カムリA群81頭、カムリC群23頭<sup>2)</sup>、タイコA群65~75頭、タイコB群40~50頭、雄谷の群れ35~45頭、国見の群れ40~50頭が知られている。

中宮温泉近くのジライ谷で吉野谷村と白山自然保護センターによって餌付けされているカムリの群れは、餌付け以来15年間に2回の分裂をみた。昭和41年餌付いて直後に分裂したカムリB群は昭和48年頃より明確な記録がなく、オスグループが繁殖力の弱いグループでその後消滅した可能性がある。昭和56年の冬から春にかけて2回目の分裂があり、23頭のカムリC群が生まれ、餌場を共有しながら母群カムリA群の遊動域の一部を使っている。

餌付けは当初よりできるだけ野生を保つために、給餌場と観察場を分離すること、一般観察者からは食物を与えず、管理者の与える餌も加工しない大豆、小麦、トウモロコシ、リンゴに限ったこと。冬期間は餌を与えないことなどに留意してきた。これらの方法によって、観察者にいたずらしたり、周囲の旅館等への侵入はほとんどなく、野生味があって落ちついたサルとして評価されている。また近くに田畑や果樹園がないことから、それらへの被害も発生していない。

白山林道の開通と、それによる観光客が増加した頃から、来園者が与える食物から本来白山のサルは知ることのなかったバナナやミカンを食べるサルが出現した。中宮温泉の旅館周辺に食べものをねだりに来たり、ジライ谷向いの白山林道で停車した車に接近していくなど、やや馴れず

1) 河合雅雄ほか 1970, 白山周辺におけるニホンザルの生態学的調査I. 白山の自然(石川県):335-343

2) 滝沢 均, 1981, 新群誕生-カムリA群の分裂. はくさん, 9(3): 12-15

ぎの心配がでてきた。カムリC群は白山林道の料金所より上流に行動域を固定しつつあり、餌場へはA群との関係から出にくくなっていることから、車中から餌を与えたりすると常時林道へ出て車を待つようになる危険がある。これらがエスカレートすると、“こじきザル”や“いたずらザル”として白山の野猿の価値を失うばかりでなく、人や物に対する被害発生に結びつく。それを防ぐには何よりも餌場以外で一般観察者や観光客から食物をもらうことを絶対におぼえさせない事である。

蛇谷上流域に遊動域をもつ国見の群れがある。夏は国見山の南斜面から瓢箪谷にかけ、冬は姥が滝周辺を遊動していた群れで、白山林道の工事中にもしばしば沿線で見られている。昭和52年6月に約50頭(林業公社職員観察)、同年9月にサブグループと思われる2集団計37頭を13号トンネル上方で観察している。これを最後に国見山、瓢箪山の林道斜面からサル情報がなくなった。昭和55年には三方岩岳で大きな群れが観察されている(白川村大杉氏情報)ことから、以前国見山を中心に遊動していたこの群れが、白山林道の開通によって、瓢箪谷の奥、三方岩岳から野谷荘司山へ移動したものと推定される。冬期の生息地は調査のため入山が困難な地域であるため把握されていないが、姥が滝周辺と考えられる。

### 3. ツキノワグマ

尾添川流域は牛首川上流部と合せてツキノワグマの分布密度が高く、人の近づきにくい地域や原生林が多いこともあって、クマの越冬地としても良好な環境を残している。約1km四方の国土数値情報でいう基準地域メッシュを単位としてみると、尾添川流域面積約190km<sup>2</sup>のうち村落や道路沿線と亜高山帯から上部を除く約110km<sup>2</sup>がクマの越冬可能地といえることができる。

この一帯は古くから伝統的にクマ狩が行なわれてきた地域で、現在も有害鳥獣駆除隊によって狩は続けられている。過去5年間におけるクマの捕獲は全て残雪期に集中しており、直接駆除隊と接触して調査した捕獲頭数は、昭和52年14頭、53年5頭、54年10頭、55年14頭、56年16頭であった。白山ろく3か村(吉野谷、尾口、白峰)のクマの推定生息頭数300~400頭<sup>1)</sup>のうち、面積も大きく、原生林の多い尾添川流域には半数以上が分布すると考えられる。アメリカの各地のクロクマの生息動態の研究<sup>2)</sup>では、生息数の10%程度までの捕獲では地域個体群は減少傾向にないといわれている。これからみると尾添川流域でのクマの捕獲数はこの地域のクマの数を急激に減少させるものではないと推定できる。

クマは常に害獣として追われている動物なので非常に警戒心が強く、人や車の近くへはめったに姿を見せない。従って白山林道がクマの分布の中心部を縦貫しているにもかかわらず、林道でクマを見たという情報はほとんどない。これは林道が利用されている期間はクマがその沿線を避けて生活しているものと考えられ、生息地分断の影響はある。しかし夜間と冬期間通行がないこ

1) 森下正明・水野昭恵、1970、ニホンツキノワグマの習性と個体数推定。白山の自然(石川県):322-329  
2) Cowan, I. McT., 1972, The status and conservation of bears of the world.  
B Bears · BM: 343 ~ 367

とと、トンネルが多いことのため、林道の影響はかなりやわらげられているとは推察される。

4. 小ほ乳類等

中宮温泉・白山林道沿線には、白山およびその周辺に分布するほ乳類43種のうち高山帯だけに分布するミズラモグラ・ニイガタヤチネズミ、人家周辺だけに見られるアブラコウモリ・ノネコ、そして少雪地にわずかに見られるニホンイノシシの計5種が分布していない。その他の白山地域に分布する全ての38種(表4-9)がこの地域で確認または分布推定された。

表4-9 白山地域におけるほ乳類相及び尾添川流域における確認

科名・種名	白山地域の分布			尾添川流域における確認
	平野部	山地帯	亜高山帯 及び高山帯	
キクガシラコウモリ科 キクガシラコウモリ コキクガシラコウモリ		○ ○		標本 標本
ヒナコウモリ科 モモジロコウモリ シナノホオヒゲコウモリ カグヤコウモリ ウサギコウモリ テングコウモリ コテングコウモリ ユビナガコウモリ アブラコウモリ	○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		捕獲 推定 推定 標本 標本 標本 推定 -
トガリネズミ科 カワネズミ トガリネズミ ジネズミ		○ ○ ○	○	推定 推定 推定
モグラ科 ヒミズ ヒメヒミズ アズマモグラ ミズラモグラ	○ ○	○ ○ ○	○ ○	標本 標本 標本 -
ウサギ科 トウホクノウサギ	○	○	○	目撃
リス科 ニホンリス ムササビ ホンシュウモモンガ	○ ○	○ ○ ○		目撃 標本 推定
ヤマネ科 ヤマネ		○		推定



科名・種名	白山地域の分布			尾添川流域における確認
	平野部	山地帯	亜高山帯 及び高山帯	
ネズミ科				
ニイガタヤチネズミ			○	-
トウホクヤチネズミ		○		推定
ヒメネズミ		○		標本
スミスネズミ		○		標本
アカネズミ		○		標本
ハタネズミ		○		推定
ハツカネズミ	○	○		推定
ドブネズミ	○			情報(中宮温泉)
クマネズミ	○			?
イヌ科				
ホンドタヌキ	○	○	○	捕獲(白山林道)
ホンドキツネ		○	○	目撃
ノイヌ	○	○		目撃
イタチ科				
ホンドイタチ	○	○		目撃
ホンドテン	○	○	○	目撃
ホンドオコジョ			○	推定(三方岩岳)
ニホンアナグマ	○	○		目撃
クマ科				
ニホンツキノワグマ		○	○	標本
ネコ科				
ノネコ	○			-
オナガザル科				
ニホンザル		○		一群餌付け
ウシ科				
ニホンカモシカ		○	○	標本
イノシシ科				
ニホンイノシシ		○		-

オコジョは通常高山帯に生息するが、高三郎山での確認などからみて、岐阜県境の陵線部には分布していると考えられる。食虫目とげっ歯目の中に、推定したものがいくつかあるのは、この地域で確認はなくとも白山ろくの周辺地域で採集されているもので、植生、標高からみて分布は確実とみてよい種である。コウモリ類は他の調査が少ないのでさらに未記録の種が見つかる可能性を残している。この5年間に尾添川流域で記録されたもののうち、モモジロコウモリ、ウサギコウモリ、テングコウモリとコテングコウモリは、今調査によってはじめて石川県下から記録されたものである。白山林道のトンネルは夜間通行がされていないので、コウモリ類の夜の休息場

として使われている。コテングコウモリ、モモジロコウモリがトンネルの天井に止っているのを観察した。

ドブネズミ、クマネズミは人間についてきたり、ゴミの多いところに出現するものであるが、中宮温泉に見られるだけで、林道沿線では確認されなかった。同じような意味で、ノイヌは一里野から中宮温泉の間に見られるが、通常は一里野を本拠地としているノラ犬と見ることができる。ノネコは入り込んでいない。これらいわゆる俗化指標種は中宮温泉までしか入っていない。